

# 低学年 児童期の学習

～保護者のみなさまへ～



当たり前ですが、どの教科の勉強も文字や数字という記号を介して行われます。つまり、読む力が達者なら同じ勉強をしても早く正確に学習事項を理解することができます。ですから、低学年児童期においては、学習活動を円滑にするための前提として、「まずは読む力をしっかりとつけておこう！」ということが目標になるでしょう。

読む力は一朝一夕には養えません。読解力があるかないかは、学習の難度が上がる4・5年生の頃に明確になりますが、そのときに後手を踏んでいるとわかったのでは手遅れです。今のうちにしっかり手を打っておきたいものです。



大人なら、文章の流れを目で追いながら瞬時に著述内容を理解できます。これが**黙読**ですが、子どもは初めから黙読できるわけではありません。そもそも、人間が長い歴史のなかで文字言語を得たのはつい最近のことで、気が遠くなるほど長い間音声言語しかもっていませんでした。日本で文字が一般に普及したのは平安時代と言われますが、音声言語は太古の昔から存在します。したがって、耳から入る音声の言葉を理解する脳内中枢（ウェルニッケ野）はありますが、文字の言葉を理解するための中枢は存在しません。では、文字言語の伝える内容がわかるのはなぜでしょうか。それは、文字列を目で追いながら、脳内でその文字の読みの音声をイメージ（自分の声をイメージする）することで著述内容を理解できるからです。つまり、文字言語を音声言語に変換して理解しているわけですね。

この「視覚による文字情報の入力 → 文字情報を音声情報に変換 → 著述内容の理解」という脳内作業がスムーズかつ正確にできるようになるためには、文字の一つひとつに対応する音を声に出して照合する練習を一定期間繰り返すことが必要です。そうしているうちに、「ひ・ま・わ・り」と1文字ずつ区切って読んでいた段階から、「ひまわり」と言葉のまとまりを識別した読みの段階へ移行し、さらに声に出さなくても脳内で音声の言葉に変換しながら読む黙読段階へ進んでいきます。この練習を丁寧にしてきた子どもは、素早く正確に書かれている内容を黙読で理解できるようになりますから、読書を快適に楽しめるうえ、新しい語彙をどんどん増やしていく流れを築くことができます。



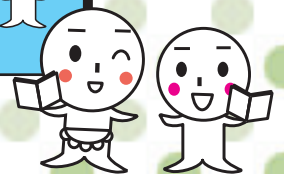


この記事をお読みの方々は、お子さんが2歳のころにはすでに文字を教えておられたことでしょう。初期段階では、おかあさんが文字に対応する音を声に出して教え、子どもにも反芻させながら、文字言語の遣い手になるための準備をサポートされたのではないのでしょうか。おそらく、3～4歳頃には絵本を楽しめるようになり、さらに5歳前後にはかなりの文字量の本を楽しむようになられたでしょう。しかしながら、この年齢ではまだ達者な黙読には至っていません。なかには前述のように、挿絵などを頼りに筋立てを楽しむだけの雑な読書に陥っているお子さんもいます。親は、「もう読める」と安心してしていると、このような落とし穴にはまっているケースもあります。



おたくのお子さんの読みの力はどんな状態でしょうか？ まずは現在の読みの状態を確かめてみましょう。一度、教科書や児童書の1ページを、お子さんに音読させてみてください。すぐ躓いたり誤読したりするようなら、黙読も不完全でちゃんと読んでいません。読みが不正確で手間取ると、同じ文章を読んでも読了に時間がかかるうえ理解も不十分ですから、勉強しても成果があがらず、テストのような制限時間内で正解を得る競争においても後れを取ってしまいます。音読が上手にできてこそ、黙読もしっかりしてきます。年齢が上がってからも遅くないので、音読を繰り返し練習することをお勧めします。

「音読の繰り返し→黙読の基盤形成」の流れを踏まえ、弊社では低学年部門に入会されたご家庭のお子さんに、「音読練習帳」を配布しています。これは、良質の子ども向けの物語（著作権の問題をクリアしたもの）を編集作成したもので、楽しく読みの練習をすることができます。学年に応じて、一文ずつ、あるいは段落ごとに親子交替で読んでみてはいかがでしょうか。おかあさんの読みを聞いて、「自分ももっとうまくなりたい！」という欲求を高めながらお子さんもがんばるでしょう。それを聞いておかあさんがほめる。このくり返しで、知らず知らずのうちにお子さんの読みは達者になっていきます。無論、弊社にご縁をいただけないご家庭もあるでしょうが、その場合、児童向けの図書でお子さんが興味をもったものを使って同じように練習してみてください。楽しい時間になるし、お子さんの読みは確実に上達していきます。



「うちの子は本が嫌いです」とおっしゃるおかあさんがときどきおられます。しかし、元から嫌いな子どもなんていません。多くの場合、黙読がスムーズにできなくてストレスになることで本を嫌っているのだと思います。うまく黙読に移行したお子さんは、例外なくいろいろな本を手にするようになります。この流れを築いていきましょう。そうすれば、勉強の手段としての読みの力も整っていきますから、小学校課程の学習の流れにも乗っていけるでしょう。親子で楽しい音読練習を！

